

磨本刀

白井喬一

鑓唐一本刀

完結編

¥ 270.

昭和 34 年 5 月 25 日 発行

著 作 者 白 井 喬 二

発 行 者 矢 貴 東 司

印 刷 者 東英印刷株式会社
(北 山 茂)

発 行 所 株式会社 桃 源 社

営業所 東京都千代田区神田神保町1-30

電話二九局 四 九 五 一、二 番

振替口座 東京六四三五一番

©

目次

雪麿一本刀

板ばさみ	セ
後家ばな	三
高飛び鳥	元
剣技百倍	五
奉納手くだ	七
必勝晴れ	七
雲か霞か	一〇四
武権の鬼	一三〇
二十四歳禍	一三六

人妻さくろ	一五二
武権書の罪	一六九
爪のさき	一八五
土壇場	二〇一
御前試合	二二九
非常の月	二三一
脱走獣	二四六
鷹 トビ と鷺	二六〇
最大試合	二七六
大団円	二九三

雪麿一本刀

（完結編）

板ばさみ

一

「青江が、雪麿に斬りまぐられて這う這うのていでにげまわつたという話だ」

うわさはハヤイものだ。

老中府にまでこのはなしがつたわつた。

「いや、それはウソじや!」

強くこれを打ち消したのは松平信頼だつた。

「わしがこの目でちゃんとみておる。青江はいつもながら余裕しやくしやくたる闘いぶりであつた!」

たれよりも、自分が一番、青江のヘトヘトにつかれてにげにまわる敗色ぶりを見ていくせに、こういつてタ
イコ判をおした。

「はつ、左様でございましょうな」

「天下第一の劍筋が、そうたやすくおとろえるはずはないと存じた」

鶴のひと声で、これによつて老中府からは「雪麿強し!」のうわさはたちまちケシとんでしまつた。

ところが、心の中でこのうわさを固く信じたのは若い老中の前田義則だつた。かれだけは、

「そうあろう。雪麿はだんだん強くなる一方だから、ひよつとするともうとつくに、青江のうでまえを越しているかも知れん!」

と察した。

この義則にとつて今一つうれしいことがあつた。

それは万代氏正が、大名として復讐することに決定したことだつた。

「さてさてよろこばしい!」

悪臣ばかりがさかえるわけではなく、ときたまには正

論が勝つこともあるのだ。

「よし、ひさしぶりに氏正をたずねて祝いの言葉をかけてやろう」

そう思ったので義則は麻布の万代家に出かけて行つた。

「万代——」

「おおこれは前田御老中……ようこそ」

「御老中はよしてくれ。友人の間から、前田とか義則とかよんでもらいたい。もう復籍の正使はまいつたろう？」

「はい、昨日まいつた——いろいろと肝胆をくだいてもらつてすまぬ」

「なあに——」

心のゆるし合つた仲だからさつぱりした應對だつた。

「そこではいる屋敷だが、元の万代家はやはり後からついで男が、あのまま万代家の名をつづけるそうだから、つまり万代家が二軒できたわけだ。しかし元々こつちがホンモノだからべつに氣にかけずに、どうかまつりごとに精を出してくれよ」

「心得た。できるだけ江戸治下のためにつくそう」

「うん……お互いにこれで心強くなつた。それについて、こうなるまでわしのところへ、ねつしんにかよつたのは雪麿だ。あの男はここへ見えるか？」

「いや一向に……無事であらうか？」

「無事なばかりか、刀がヒドクつよくなつたらしい」

「それならいいが——」

といつたとき、鏡姫が茶盆をもつてはいつてきた。

「御老中さま、いらつしやいませ」

「おお鏡姫か、このたびは祝着でござつた」

鏡姫はまだ尼さんにならず、頭は元のままだつた。

二

「鏡姫」

前田義則は茶をすすりながらいつた。

「目出度いといえ、そなたもこんど再び大名の姫君としてかえりさきだ。よかつたね？」

「はい」

「わしは何しろ姫のまだ這い／＼してゐたところからのな

じみた、いちどなど、わしの膝の上にオシツコされたこともある」

「あら……」

「ははは、こつちも年を取るはずだ」

「御老中さま」

「これこれ姫、御老中はよしなさいよ。前田のおじさまとか何とかいつたらよかろう——ねえ氏正」

「左様」

「万代家は先考のころから正義の家門として立つてきた。ほんとうの意味の名門だね……なればこそよいよ復籍となるとたれも反対することができぬ」

義則がここまで話したとき、障子の外にとりつきの女中がかしこまつた。

「お姫さま、お客さまがお見えになりました」

「まあ、どなた様ですか？」

「尊源寺尼寺の総領さまで宝念とおつしやる方の由。お駕でございます」

「え？」

姫よりもそばの氏正が思わずおどろきの声を発した。

「それでは、剃髪のためにやつて来たのだ」

「なに」

義則が聞きとがめた。

「ティハツというところ？」

「頭をまるめるあのティハツだ」

「たれが頭をまるめるのだ」

「これにはいろいろわけがあつて……」

氏正はあわててしまった。

「実は延期のむねを申しおくれたのだが、ちようと宝念が旅へ出て留守の間であつたから、若しかするとかけちがつたのかも知れぬ」

「おい氏正、たれが一体頭をまるめるのだ？」

と義則が口ばやに同じことをたずねた。

「鏡だ」

「なに？ 姫がなぜッ——」

「このほどから、そういう決意をかためているのだ」

「そんなバカな、せつかく復籍しながら！」

「いかがいたしましたしょう？」

女中がもどかしがつて障子の外で再びうかがいを立て

た。

「そうだな。仕方がない……とにかくここへお通し申してくれ」

「はい」

女中は玄関のほうへ出て行つた。

「氏正、姫の頭をまるめる理由は？」

「まあ世をはかなんだとでも申そうか」

「しかし延期にとりきめたのだろうか？」

「延期しないと雪麿が切腹するといひ出したのだ……姫もこれにはハタと当惑した」

「御免こうむります——」

尼寺の総領が、もうみちびかれてはいつて来た。

三

「御免ください……」

尊源寺の宝念がしずかにはいつてきて。

万代が元大名だということは宝念はもちろん知つていた。けれどここに老中の前田までが来合せていようとはユメにも思はずはなかつた。

「旅をいたしておりますな」

宝念は左右にあいさつをおえると、こうつぶやいたが、当の鏡姫がそこにいるのですぐそつちへ向きなおつた。

「お姫さま、今日がお約束の剃髪の日でございますので、旅を中途できりあげて帰つてまいりました」

「まあ、それは……お世話さま有難うございます」

鏡姫も一応そういつて礼をのべた。

「いやいや——」

宝念はみるからに満足そうだった。

七十近いと思えるが、まだ五体も至つてたつしやで、

壯者をしのぐという側の人らしかつた。

「これが僧侶のつとめでござるゆえ」

「はい」

「わが寺門でもお姫さまのことは大層な評判でな、拙僧も面目をほどきました」

「……………」

「全山全院と申そうか、今日はお姫さまをお迎えするために、みなが手をあげてお待ち申しております次第。時

にな」

「はい？」

「尼僧としては格外のお名も用意してまいりました。剃髪をおえたらここに命名いたし、すぐさまお駕籠にておつれ申しますゆえ、なにとぞよろこび下さい」

「はい……」

「では、そろそろ御刀をおあていたそうか……御兄さま、御客人も、そのままにいらせられて結構でございます」

「は！」

氏正が何とかいなければならぬ仕儀に立ちいたつて、一礼したがグツとつまつた。

延期の申入れをしたことは、宝念は少しも知つていないようだ。——はて、どうしたらよいものか？

「鏡」

まず姫をかえりみて、ささやくように、

「そなたの所存は？」

「はい……」

鏡姫も当惑にかきくれている模様だ。

「よろしいのか？」

「いえ」

「それなら……早く申上げねば」

「はい」

鏡姫も、自分から寺門にかけこんで帰依した剃髪のみだが、尼になれば切腹するとさげんだ雪麿——
おそらく本当に切腹するだろう。

「僧正さま」

「はい？」

「ちよつと申上げることが……剃髪の儀は本日はおさしとめになつて下さいませぬか」

「えつ？ なんじやと——」

宝念は思わずおどろきの声を発した。

四

「剃髪をさしとめてくれと？」

宝念は口の内でつぶやくと、更にもういちど愕然とした。
た。

「それはまた、なぜに……実はな、これについて拙僧も

容易ならぬ立場にたたされておるのじや」

「よく存じております」

「いや存じてはおられぬ……おられぬから、そのように安々と剃髪をさしとめるなど申さるるのだ」

「……………」

「実をいうと、大名の姫君が尼僧になることについて、寺門でもはじめから反対があつた。それを拙僧がおしきつて叶えることにいたしましたのだ」

「……………」

「だい一、剃髪の儀も正式には本山でいたすべきであるが、有髪の姫でなくわしの手ですでに剃髪したという名目を立てるため、ここで刀をあてておつれすることにしたのじや……まつたくこまる」

宝念は息をのむようにいつた。

「わしも仏業五十年、さいわい寺山の信用を得てきたが、これで一ぺんにくつがえつてしまう。いやわしの一身はとにかく、信仰というものはそのようにタイイのないものではない」

「まつたく——」

氏正も黙つてひつこんではおられなかつた。

「じつはこの延期の儀は、過日御僧のもとまで使いをやつて申入れたのでございます。ところが御旅のためそのむねがハツキリと通じなかつたものとぞんじます」

「ほう？ それは一こう承知せなんだ」

「つきましては——」

氏正は、鑓姫のほうにむいていつた。

「理由を申上げるがよい」

「はい……………」

鑓姫も、どうしていいか分らなかつた。しかし雪麿を死なしてはならぬ。

「僧正さま、じつは……………」

他人には通じない理由かも知れないが、姫は必死にはなした。雪麿の反対に会つて、これこれしかじか。

「その人は、いい出したら本当に切腹する人でございますから……なだめた上でなくては、尼になることは出来ませぬ」

「それは幾分、オドシだろう」

「いえ、そんな人ではございません」

「理窟が立たぬ、人の信仰をさまたげるとは奇ッ怪なはなしだ」

「殺生をいたしたくごいませぬ」

鏡姫もこことばかりいつた。

「僧正さま、お袖におすがりいたします。その者をなだめます間、少々おのぼし下さいませぬか」

「ふうん？」

「横合から言葉やさしはさむが……」

老中の前田義則はついに宝念に自分を名乗つた。

「わしも雪麿はよく存じておる。やはり納得させねばならぬと思う。十日ほど待つてくれまいか？」

「はい、御老中のお口添えとあらば承知せぬわけには行きますまい——なれど拙僧の顔もお立てくだされたい……」

五

さて鏡姫は、どうにかこうにか頭をまるめないですんだ。
翌日になると、姫は兄の氏正の前に出ていつた。

「お兄さま、昨日はいろいろ御心配をおかけいたしました……前田さまも、とんだところへいらしてさぞかし」

「うん。かれも驚いたろう」

氏正はうでぐみをして不安な面持ちだつた。

「だが、この後始末は一そう困つたことになりそうだな」

「はい——」

「お前はいつたい、今の心はどうなのだ？」

「今の心と申しますと？」

「尼になりたいのか、それとももう頭をまるめる事はイヤになつたのか？」

「お兄さま、私はそんな輕薄な女ではございませぬ。元元、よく考えぬいた上の決意でございますから、仏門に帰依したい心にすこしの変わりもありませぬ」

「ふうん、そうか」

「ただ、私としては雪麿さまのお身の上を案じましての事……ですから、雪麿さまにはやくお会いして納得していただきたいと思ひます」

「なるほど——」

「これから、ちよつと出て参つてもよろしうございませうか？」

「どこへ行くのだ」

「香鳥さまをおたずねしたら、ひよつと雪麿さまのお居所がわかるかも知れませぬ」

「それとも春歌しゅんかの宅かな」

「いいえ、春歌さまのところへはおたずねいたしたくありません——では、行つてもよろしうございますね？」

「老婆をつれてまいれ」

「はい」

鏡姫はさつそく召使いの老女をつれて家を出た。

銭瓶橋ぜにがしの円九郎ツバ店の前に立つて鏡姫は、

「まあ！」

とおどろいた。

閉店——

と書いた張紙がしてあつて、横に小さく家人の移転いせんさ

きがしるしてあつた。

「あ？　ここから近い、二町ほど行つた路地口を左にまがるとしてあります。婆や、行つてみますけど……足は

つかれませんか？」

「お姫さまこそ——私はいつも申すとおりあるくことは馴なれておりますから」

「では行きましょう」

張紙で示してある路地口をまがると何軒もならんだ長屋の内のみすばらしい一軒だつた。

「ごめんください」

「あら……鏡姫さま」

みすばらしい家のあがり口に香鳥がすわつていた。

「いらつしやいませ。とうとうこんな所へ引つ越しましたの」

「御閉店なすつたのですとね」

鏡姫もそういつただけで、急には雪麿の居所などたずねる気になれなかつた。

六

「鏡姫さま」

やがて香鳥のほうからたずねた。

「なにか御用でもおありでお越しになつたのですか？」